

生きている現実受け入れ

この命と共に

医療的ケア児と家族の歩み

「もう無理」。二〇一五年五月、京都市内にある総合病院の分娩室で、滋賀県内に住む田中知子さん（当時30歳）は、陣痛の痛みに耐えかねて弱音を吐いた。そばにいた夫の寛さん（当時31歳）は「頑張れ」と励まし続けた。

分娩室に入って十四時間が経過したが、いきんでも分娩が進まない。主治医が知子さんに馬乗りになって腹を強く押さえた。胎児の頭が半分出てきた。すでに名付けていた「ふたばちゃん」にもつすべ会える。知子さんの腹を、主治医が再び押した直後だった。

「痛い」。分娩室に悲鳴が響き渡り、知子さんが苦しげな表情を浮かべた。分娩前に胎盤がはがれる「胎盤剝離」

田中家 ①脳にダメージ

の可能性があるとして、緊急帝王切開になった。看護師から「ご家族を呼んでください」と言われ、母子ともに危険な状態と察した。

手術開始からすぐ、ふたばちゃんは生まれた。体は土色でぐったりしており、新生児集中治療室（NICU）のある病院へ搬送することになった。知子さんは子宮が破裂し、出血多量で輸血が必要だった。瀕死のわが子を見た瞬間、寛さんは涙があふれた。

だが、意識が朦朧とする知子さんには「元気で」と言ってお安心させ、場を取り繕った。ふたばちゃんは、子宮破裂の影響で酸素不足となり、脳にダメージを受けていた。体温を三三〜三四度に低く保

ち、脳を保護する「低体温療法」を受けることになった。主治医に「この子は生きていけるのか」とたどしたが、「分からない」と応じるのみだった。

医療関係の企業に勤めていた寛さんは、出産後すぐ東京へ単身赴任するはずだった。想定外の事態に、赴任を一カ月延期してもらい、産後の二週間、長男はじめ君（当時3歳）と一緒に、知子さんとふたばちゃんの入院先を見舞った。病院へ向かう道中、知子さんに「頑張れ」と言っていたという。

病院では、ふたばちゃんの主治医から厳しい現実を聞いた。将来的に歩くのが難しいこと、自発呼吸がないこと、耳も聞こえず目も見えないこと…。いいことを一つも言われない現実を淡々と受け止め、それでもいつか元気に走る姿を思った。

ある日、はじめ君を連れて、「心や体に刺さった苦しみを抜いてくれる」と伝わる地蔵菩薩が安置される京都市の石像寺を訪ねた。菩薩の前で自問自答していたとき、ふと悟った。

「希望だけで生きるのはいらない。ふたばちゃんは生きている。知子も無事。現実を受け入れなければ、良いことは無い」。晴れ渡る空の下、家族を守ろうという思いを強くした。

（文中、見出しはすべて仮名）



地蔵菩薩像が安置される地蔵堂。外壁には、苦しみが癒えた人らが奉納した、釘抜きを張った絵馬が飾られている（京都市上京区の石像寺で）